

# 英語教育からみた表現形式 *A and B* とその含意をめぐって

高橋 玄一郎

キーワード：接続表現、*and*、コンテキスト（場面、状況、文脈）、含意、英語教育

## 概要

本稿は、現代英語の接続表現の一つである *and* に着目し、そのコンテキスト（場面、状況、文脈）に応じた振る舞いを、主として意味（特に含意）の面から観察し、その類義表現とも照らしながら、*and* が伝達しうる含意について考察する。英語教育・学習上、*and* のような、相対的に使用頻度の高い語彙ほど注意が必要で、安易に読み過ぎたり、話し言葉的な振る舞いと書き言葉的な振る舞いを混同して用いたり、表現効果を認識しそこなっている場合が往々にしてある。*and* を日本語感覚の「と」や「そして」のみで捉えていることが多いのもその一端であろう。英語の *and* は日本語のそのような語感をもちつつも、文脈や使い方に応じて、幅ひろく、異なる振る舞いをする。こうした点は、英語教育・学習の盲点にもなっているように思われる。接続表現 *and* が持ちうる複数の含意を、学習者の視点で相互に関係づけ、それらを授業や学習によりよく資する方向で活かす可能性を共有したい。

## 0. はじめに

普段、慣れ親しんで使っている *and* を、立ち止まって、その振る舞いを観察してみる。言語を運用するという場合、運用するのは言語の構造や機能に関する知識であると考えられるため、本稿では、現代英語の *and* に係る知識を整理するという意味もこの論考に込めることとしたい。また本稿は、主として、筆者が共通教育課程のクラスで適宜、教材や補助教材として使用しているものの中から、学術的な論説調のもの2編（一編は国際科学誌、もう一編は平易な叙事的散文）、公的なスピーチ原稿一篇をとりあげ、それらから適宜、用例を拾い検討を加える。

## 1. 表現形式 *A and B*—形式的・意味的観点からの考察—

普段あまり気かけず、当たり前のように目にする *A and B* という形式であるが、まず、*A and B* を構成する *A* と *B* の構成レベルや、その構成上の形式面、ならびに意味について考察してみよう。

### 1.1 *A and B* の形式をめぐって

次にあるのは科学誌 *Science* に掲載された、米国のエネルギー政策に係る論考の要旨である。要旨という、意味的なまとまりを有する5つの文から成る一つのパラグラフ内で、7つの *and* が使われている。便宜上、*A and B* を含む部分には下線とその番号を付す（オリジナルにある参照補注番号は省略）：

(1a) The release of carbon dioxide (CO<sub>2</sub>) and other greenhouse gases (GHGs) due to human activity  
 (1b) is increasing global average surface air temperatures, disrupting weather patterns, and acidifying the ocean. Left unchecked, the continued growth of GHG emissions could cause global average temperatures (2a) to increase by another 4°C or more by 2100 and by 1.5 to 2 times as much (2b) in many midcontinent and far northern locations. Although our understanding of the impacts of climate change (3) is increasingly and disturbingly clear, there is still debate about the proper course for U.S. policy—a debate that is very much on display during the current presidential transition. But putting near-

term politics aside, (4a) the mounting economic **and** scientific evidence leave me confident (4b) that trends toward a clean-energy economy that have emerged during my presidency will continue **and** that the economic opportunity for our country to harness that trend will only grow. This Policy Forum will focus on the four reasons I believe the trend toward clean energy is irreversible.

(Obama 2017, summary ; 太字は高橋による)

[概要：人間の活動に起因する二酸化炭素やその他の温室効果ガスの放出によって、地表全体の温度が上昇し、気候変動パターンが乱れ、海水の酸性化を招いている。こうした事態を抑制していくには、政権にかかわらず、経済活動との両立を図れるクリーンエネルギー政策の継続が必要である。この主張となる根拠も科学と経済の面から示す]

*A and B*について、まず、AとBに相当する構成要素の形式を見える。該当箇所を抜き出してみよう。

(1a) The release of **A** (carbon dioxide (CO<sub>2</sub>)) **and B** (other greenhouse gases)... :

**A** (名詞句) **and B** (名詞句)

[二酸化炭素とその他の温室効果ガスの放出]

(1b) ... **A** (is increasing global average surface air temperatures, ) **B** (disrupting weather patterns,) **and C** (acidifying the ocean) : <sup>1</sup>

**A** (動詞句), **B** (動詞句), **and C** (動詞句)

[...地表全体の平均気温を高め、気候変動パターンを乱し、海洋を酸性化させている]

(2a) ...to increase **A** (by another 4° C or more by 2100 ) **and B** (by 1.5 to 2 times)... :

**A** (副詞句) **and B** (副詞句)

[...2100年までにさらに4℃以上、加えて、その、1.5倍から2倍にあたる温度が上昇する...]

(2b) ...in **A** (many midcontinent)<sup>2</sup> **and B** (far northern locations)... :

**A** (名詞句) **and B** (名詞句)

[...内陸と極北の多くの地域で...]

(3) ...is **A** (increasingly)<sup>3</sup> **and B** (disturbingly clear)<sup>4</sup> ... :

**A** (形容詞句) **and B** (形容詞句)

[...ますます明瞭になっていると同時に、人々を心配させるほど明らかとなっている...]

(4a) ...**A** (The mounting economic)<sup>5</sup> **and B** (scientific evidence)<sup>6</sup> ... :

<sup>1</sup> ここでは、B と C の現在分詞形 *disrupting* と *acidifying* の直前に、それぞれ *be* 動詞 *is* が隠れているとみる。

<sup>2</sup> ここでは、A の *midcontinent* の直後に *locations* が、隠れているとみる。

<sup>3</sup> ここでは、A の *increasingly* の直後に *clear* が、隠れているとみる。

<sup>4</sup> ここでは、B の *disturbingly* の直前に *is* が、隠れているとみる。

<sup>5</sup> ここでは、A の *economic* の直後に *evidence* が隠れているとみる。

<sup>6</sup> ここでは、B の *scientific* の直前に *mounting* が隠れているとみる。

**A** (名詞句) **and B** (名詞句)

[経済と科学の面からの増している証拠]

- (4b) ...leave me confident **A** (that trends toward a clean-energy economy that have emerged during my presidency will continue) **and B** (that the economic opportunity for our country to harness that trend will only grow) :

**A** (名詞節) **and B** (名詞節)

[私の政権期間中に姿を現したクリーンエネルギー経済へと向かう兆しが、今後も続くということと、その傾向に乗じる米国経済の機運が、今後、増していく一方であること]

*A and B* に係る **A** と **B** の各形式は、上記7例からは、名詞句、形容詞句、副詞句、名詞節という具合に、句と節とに及んでいる。これらの多様な文法形式は、それらを構成要素として含む各文の中で、個別の意味伝達機能を果たしている。意味については、1.2節で触れることとする。

また、すでに例示に係る脚注でも簡単に触れているが、表現の意味が伝達できる範囲で、表現形式が大きくならないように、適宜、省略を用いて経済的にまとめる工夫が散見される。多くの者が経験的にすでに慣れ親しんでいる形式であろうが、言語表現の冗長さを回避し、読み手、聴き手に認識されやすく、かつ、分かりやすさに通じる表現の経済化のありようについて、視覚的にもあらためて点検しておこう。(2b), (3), (4b) に係る3種の *A and B* 形式について、説明の便宜上、(3), (4b), (2b) の順で確認する。なお、構成上の工夫を語の配置からみるため、注目する語の冒頭にアルファベット記号を付す。

- (3) 想定される発想の原形式：**AX + BX**

... is **A** (increasingly) **X** (clear) **and B** (disturbingly) **X** (clear)

——> 実際の表現：**(A + B) · X** <表現の経済化>

... is **A** (increasingly) **and B** (disturbingly) **X** (clear)...

- (4b) 想定される発想の原形式：**XA + XB**

...**X** (leave me confident) **A** (that trends toward a clean-energy economy that have emerged during my presidency will continue) **and X** (leave me confident) **B** (that the economic opportunity for our country to harness that trend will only grow)

——> 実際の表現：**X · (A + B)** <表現の経済化>

...**X** (leave me confident) **A** (that trends toward a clean-energy economy that have emerged during my presidency will continue) **and B** (that the economic opportunity for our country to harness that trend will only grow)

考察の順序が前後したが、(2b) の形式は、上の (3) と (4b) と比べ、やや複雑である。

- (2b) 想定される発想の原形式：**X · A · Y + X · B · Y**

... in **X** (many) **A** (midcontinent) **Y** (locations) **and X** (many) **B** (far northern) **Y** (locations)

——> 実際の表現：**X · (A + B) · Y** <表現の経済化>

... in **X** (many) **A** (midcontinent)<sup>7</sup> **and B** (far northern)<sup>8</sup> **Y**(locations)

(2b) は、結果的には、*many locations* という数詞と名詞の2語からなる名詞句の間に、*A and B* の形式（つまり *midcontinent and far northern*）が埋め込まれた形となっているが、名詞句全体の中心語は *locations* という名詞であるため、*locations* を説明するために、二つの構成要素（*many* と *midcontinent and far northern*）が前置されているとみることができる。この二つの構成要素が出現する順序は、逆に配置することは通常できず、それは名詞を修飾する形容表現の順序に係る英語の規則に基づいている<sup>9</sup>。

## 1.2 *A and B* の意味をめぐって

*A and B* の形式は、いずれも並置・並列をなしているが、*A* と *B* の順番は概して、恣意的ではなく、意味伝達の有効な利便性にかなっていると考えられる。

用例 (1a)、すなわち、*The release of carbon dioxide (CO<sub>2</sub>) and other greenhouse gases...* に見られる *A and B* は、含有率の面で温室効果ガスの筆頭に立つ二酸化炭素 (*A*) が、その他のガス (*B*) の前に現れている (cf. *common > rare*)。文脈上、温暖化の主要因の度合いが高いと考えられる物質が先に立つ。

用例 (1b)、すなわち、*is increasing global average surface air temperatures, disrupting weather patterns, and acidifying the ocean* では、地球全体の平均気温の上昇が気候変動パターンを乱し、その結果、海洋の酸性化を招くという叙述過程は、酸性化を招く要因の発生順序を表していると思われる（それは同時に、時間経過の流れにも沿っている）。

用例 (2a)、すなわち、*to increase by another 4°C or more by 2100 and by 1.5 to 2 times* では、倍数表現は、理解の前提となる、その基準が先に立つことが求められている（同時に、この場合、一般的な傾向を捕らえるのが先で、特定のみにみられる傾向は後になる）。

用例 (2b)、すなわち、*in many midcontinent and far northern locations* では、中心から周縁へという、通常の文脈下での我々の直観的感覚が働くのであろう、内陸部から極北方面の順で言及されている。

用例 (4b)、すなわち、*that trends toward a clean-energy economy that have emerged during my presidency will continue and that the economic opportunity for our country to harness that trend will only grow* は、確信の内容が二つの名詞節によって展開されており、前段の名詞節内で、クリーンエネルギー経済へ志向する傾向が示され、後段の名詞節内で、その傾向の行方に言及するため、理解を進める順序としては、前提となる内容が先に提示されるのが自然であり、好ましい。

ただ用例 (4a)、すなわち、*the mounting economic and scientific evidence* については、経済的、科学的な証拠、というとき、経済的、科学的のどちらが先であるべきか、また、ふさわしいか、という議論はあまり実りがないであろう。いずれにせよ、確固たる証拠があつてのことであるという点が重要であつて、関連する二つの観点からの証拠だと補足的に述べているともみられよう。

以上、*A and B* の *A* と *B* の順序は、この場合、考察対象の英文要旨の母体となる論文の主旨や目的に照らして、情報価値の優先順位が高いものが先に配置されている、また、先発要素 (*A*) が後発要素 (*B*) の基準や前提となつているときに *A* が先に立つ、とみてよいと思われる。

また、*A* と *B* の表現形式上のレベルについて、品詞にしる、句や節にしる、*A* と *B* に生起す

<sup>7</sup> 文脈上、名詞 *midcontinent* が形容詞へ転化しているとみても構わない。

<sup>8</sup> 形式に係る考察の便宜上、ここでは *far northern* を *far* と *northern* とに分けて考えずに、ひと括りとする (*far* は、形容詞 *northern* を形容する副詞と考える)。

<sup>9</sup> たとえば、Quirk et al. (1985:1337-1342) を参照されたい。

る要素は、同種の品詞、同種の構造とされる傾向がある<sup>10</sup>。

構成要素の大きさからみれば、これまで語句と節のレベルが例示されたが、節のレベルを超えて、文を構成要素とする場合もある。たとえば、先の Obama (2017) 論考中にある次例をみると、*And* が合計3つの文を束ねているとみられる（当該の3つの文に便宜上、番号 (1) - (3) を付す）：

(...) That is why American businesses are making the move toward renewable energy sources. (1) Google, for example, announced last month that, in 2017, it plans to power 100% of its operations using renewable energy—in large part through large-scale, long-term contracts to buy renewable energy directly. (2) Walmart, the nation's largest retailer, has set a goal of getting 100% of its energy from renewables in the coming years. (3) **And** economy-wide, solar and wind firms now employ more than 360,000 Americans, compared with around 160,000 Americans who work in coal electric generation and support.

(Obama 2017, 第3節、第4パラグラフ；太字は高橋による)

[概要：(ここには示されていないが、引用英文の前段で示される理由により、その結果) アメリカでは、再生可能エネルギー利用に向かっている企業について、Google, Walmart, 加えて、太陽光・風力発電関係の諸企業、という三つの企業体による事例が挙げられている。]

関連を有する3つの文が挙げられる際、初文 (1) の中に、例示を表す *for example* が埋め込まれている。3文をまとめる必要上、*A and B* という基本型を拡張した *A, B and C* 型を成すわけであるが、*and* が結ぶ構成要素が文であるため（すなわち、ピリオドで仕切られるため）、表示上、最後の構成要素となる文 (3) を導く際には、括られる最終文の文頭に *And* が立つこととなる。すなわち、視覚的には右のように理解できる：

[(文1.) (文2.) **And** (文3.)]

学習者の視点としては、文頭に立つ *And* の部分だけに集中してはならず、当該の *And* が、その文脈で果たす機能がどのようなものなのかに着目しなければならない。逆にいえば、書き言葉上、*and* が文頭に立つことの特異性に気づく必要がある。その際、この文脈では、例示を導くつなぎ言葉、*for example* が、パラグラフ構成の理解を助ける援護射撃をしてくれている。

また同様に、文脈上、すでに先行している複数の文との関係において、それらを統括する際、例示を目的とするのではなく、関連する複数の前文に対してコメントを付すために、最終文の文頭に *and* を付すこともある。次例はスピーチ原稿からの用例であるが、当該の5つの文の始まりから便宜上、番号 (1) - (6) を付す。

It is not the fact of war that sets Hiroshima apart. (1) Artifacts tell us that violent conflict appeared with the very first man. (2) Our early ancestors, having learned to make blades from flint and spears from wood, used these tools not just for hunting, but against their own kind. (3) On every continent,

<sup>10</sup> いわゆる動詞句の要素を *and* で並置する際、片方が助動詞に導かれる動詞句、もう片方が *be*-動詞に導かれる動詞句、という軽微なレベルでの異質性は許容されている。たとえば、Policies that continue to encourage businesses to save money by cutting energy waste could pay a major employment dividend **and** are based on stronger economic logic than continuing the nearly \$5 billion per year in federal fossil-fuel subsidies, a market distortion that should be corrected on its own or in the context of corporate tax reform. (Obama 2017, 第2節、第3パラグラフの1文；太字と動詞句を示す下線は高橋による；オリジナルにある引用中の注記番号は略す)



the history of civilization is filled with war, whether driven by scarcity of grain or hunger for gold; compelled by nationalist fervor or religious zeal. (4) Emperors have risen and fallen. (5) Peoples have been subjugated and liberated. (6) **And** at each juncture, innocents have suffered, a countless toll, their names forgotten by time.

(B. Obama, 広島スピーチ2016：第3パラグラフ；太字は高橋による)

[概要：人類は、その歴史上の、どこの境目をとっても、常に無数の無垢な人間を犠牲にする戦争と共に歴史を刻んできたが、単にそのような、これまでの人類による戦いの歴史的事実からみて、「広島」を特別な場所としているわけではない]

視覚的に整理すべく、*and* で統括されているとみられる、全体で6つの文 (1) - (6) を並べてみる。

- (1) Artifacts tell us that violent conflict appeared with the very first man.  
(遺構をみれば、最古の人類の間でも激しい戦いのあった事が分かる)
- (2) Our early ancestors, having learned to make blades from flint and spears from wood, used these tools not just for hunting, but against their own kind.  
(古代人は木製の武器使用の目的を食糧確保に限らず、それを人間にも向けて戦争を起こした)
- (3) On every continent, the history of civilization is filled with war, whether driven by scarcity of grain or hunger for gold; compelled by nationalist fervor or religious zeal.  
(地球上の大陸の至るところで、目的はいかようであれ（食料確保、金品獲得、国家第一主義、宗教擁護）、戦争があった)
- (4) Emperors have risen and fallen. (皇帝たちが盛衰を繰り返すたびに戦争があった)
- (5) Peoples have been subjugated and liberated.  
(民族の征服・解放が繰り返されるたびに戦争があった)
- (6) **And** at each juncture, innocents have suffered, a countless toll, their names forgotten by time.  
( (1) から (5) の、どの時代の変わり目においても、名も無き無数の無垢な者たちが苦しんできた)

要は、(1) から (5) にみるように、人類は戦争を宿命としてきたが、そのたびごとに共通して言えるのは、常に無垢な者たちの苦しみがあったのだ、という理解である。この例にみられる *and* による前文の統括方法は、先にみた例示方式の統括とは異なり、最後に、先行する複数の事例に見られる共通点を総括して印象的にコメントするという方法といってよいと思われる。

視覚的に流れの構造を捕らえるとすれば、次のようになる：

[(文1). (文2). (文3). (文4). (文5). **And** (文6).]

学習者の視点で注意すべきは、最終文が、単に前文と関係しているだけではなく、複数の先行文とどのような関係でつながれているのかを、全体のコンテキスト（この場合は文脈）から判断しなければならない点である。

なお、「単純な」添加 (*and also*) の意味で冒頭に *and* を用いることは、書き言葉でも見かけることは少なくはないが<sup>11</sup>、特に学術論文では控える方が良いように思われる。

<sup>11</sup> 学術的とまでは言えない叙事的な散文では少なくない。たとえば、次の一例：

このようにみてくると、冒頭、Obama 論考の要旨中にみられる6つの *and* は、意味の面からみると、添加による並置を示す場合と、時の経過とともに特定の現象が起こる順序を、因果関係を含意しながら示す場合に、用いられているとみてよいであろう。その論考の本論中には、要旨内よりもさらに多くの *and* が用いられている。添加、時の経過、因果関係以外の機能、もしくは含意にどのようなものがあるのか、そうした含意に対応しうる、より明示的な表現手段にはどのようなものがあるのか、そして、そもそも複数の含意をもち得るようになった接続表現 *and* の歴史的背景は、どのようなものであるのか、紙幅の許す範囲でできるだけ用例を確認しながら、以下、概観していこう。

## 2. コンテキストによる *and* の含意

*And* が用いられるコンテキスト、すわなち、場面、状況、文脈といったもの、に応じて、*and* に複数の含意がみられる事象について、たとえば、Quirk et al (1972:560-562) では、次の8つの類型に触れている<sup>12</sup>。類型ごとに挙げられた、日常語レベルの各用例には、試訳を付す。

(1) He heard an explosion and he (therefore) phoned the police.

(因果関係；彼は爆発音を聞いたので、警察へ電話連絡をした)

(2) She washed the dishes and (then) she dried them.

(時の経過；彼女は皿洗いをしてから、皿を乾かした)

(3) Robert is secretive and (in contrast) David is candid.

(対照関係；Robert は隠し立てをするが、David は率直にものを言う)

---

Why do these astronomers think intelligent life exists on other planets? The first reason is time. Scientists believe the universe is about 12 billion years old. According to Shostak and Barnett, this is too long a period for only one planet in the whole universe to develop intelligent life. The second reason is size—the universe is huge. Tools such as the Hubble Telescope have shown that “there are at least 100 billion ... galaxies,” says Shostak. **And** our galaxy—the Milky Way—has at least 100 billion stars. Some planets that circle these stars might be similar to Earth. (RE, p.51 ; 太字は高橋による)

<sup>12</sup> 各用例文の丸括弧には、*and* の含意に呼応して補いうる副詞が補足可能な範囲で挙げられているが、これはオリジナル文献からのものである。この8類型とほぼ同様の指摘が Quirk et al.1985 にも見られる。他方、Huddleston & Pullum(2002:1301-1303) は、これら8つの類型のうち4つの類型を節同士を結ぶ構文の視点から整理し、それに加えて、接続詞 *while* (時間面) と同等の機能を有する含意と、「定型化した枠組み表現」という枠を指摘し、考察している。以下、Huddleston & Pullum(2002:1301-1303) を参照のうえ、表記法の参考例として記す (*A and B* の *A* と *B* は、ここでは、節のレベルと考える)：

- Consequence: *A and B* implicates “A and therefore B”
- Temporal sequence: *A and B* implicates “A and then B”
- Concession: *A and B* implicates “Despite A, B”
- Condition: *A and B* implicates “If A then B”

なお、*while* と同等の機能を有する含意として：

- Temporal inclusion: *A and B* implicates “A while Y” (e.g. Did he come in and I was still asleep?  
[私が寝ている間に彼がきたのですか])

また、「定型化した枠組み表現」として (cf. “A and B where A is fixed or nearly so, but Y is not, and the whole is partially idiomatic”), 次例がある：

- The coffee is nice and hot.
- We always try and do our best.
- He went and told the teacher.
- They sat and talked about the wedding.
- Would you be an angel and make me some coffee?

(4) He tried hard and (yet) he failed.

(譲歩；彼は一所懸命に取り組んだが、うまくいかなかった)

(5) Give me some money and (then) I'll help you escape.

(命令・仮定の帰結；金をいくらもらえれば、あなたの脱出を手助けしよう)

(6) A trade agreement should be no problem, and (similarly) a cultural exchange could be arranged.

(類似性；貿易合意は何ら問題ないはずであるし、同じように、文化交流もお膳立てできるだろう)

(7) He has a long hair and (also) he wears jeans.

(添加；彼は長髪で、かつ、ジーンズをはいている)

(8) They disliked Taro — and that's not surprising.

(挿入的コメント・説明；彼らは太郎を嫌っていた— 驚くことではないが)

これらの用例はすべて、*and* の前後にある節（主語＋動詞の構造をもったまとまり）が並置され、その結びつき方は、場面、状況、文脈に依存しているため、語用論的な意味（いわゆる含意）が生じると考えられる。例文中の *and* の後部にある丸括弧で記された英語は、含意の類型を区別する目安となりうる（接続）副詞とみてよい。このように接続表現 *and* には、一般的な論旨の展開に係る代表的接続関係である *causal*（因果関係）、*temporal*（時間・時系）、*adversative*（対立）、*additive*（添加）という4本の柱に通じる、多彩な含意を認めることができる（cf. Halliday & Hassan 1976: 242-243）。実際の英語表現には、このような含意の類型に対応し得る様々な明示的な代用表現が複数みられる<sup>13</sup>。*but*を除き、すべての対応語に *and* が付き得ることに留意しておこう。

○因果関係の *and* に（明示的に）対応<sup>14</sup>：

*(and) accordingly, (and) consequently, (and) hence, (and) so, (and) therefore, (and) thus; (and) as a result (of that), (and) because of that, (and) in consequence (of that), etc.*

○時間・時系列の *and* に（明示的に）対応：

*(and) then, (and) next, (and) finally, (and) afterwards, (and) after that, (and) in the meantime, (and) meanwhile, (and) subsequently, (and) eventually, etc.*

○対立の *and* に（明示的に）対応：

*but<sup>15</sup>, (and) however, (and) though, (and) yet; (and) nevertheless, (and) notwithstanding,*

<sup>13</sup> 詳細は、たとえば、Halliday & Hassan (1976: 226-273) を参照されたい。

<sup>14</sup> 条件の含意（もしそうならば、その結果は...）も因果関係に含めてよいと思われる。因果関係の *and* は、“if so”の意味の *then* に近い。

<sup>15</sup> *and but* とは言えないが、*and yet*（もしくは、*but yet*）とは言える。裏を返せば、*but* には *and* の含意があるのに対し、*yet* にはその含意がない（cf. Halliday & Hassan 1976: 237）。



(and) on the contrary, (and) in contrast, (and) on the other hand; (and) despite this, etc.

○添加の and に（明示的に）対応：

(and) also, (and) ...too, (and) moreover, (and) furthermore, (and) additionally,  
(and) in addition, (and) besides (that), etc.

さて、大学生が英語と日本語のエッセイを書く際に、文章の展開上、どのような接続表現をよく用いられるであろうか。今尾（2019:13）によると、使用頻度の高い接続表現（日・英語の上位10）として、以下の接続表現が指摘されている。

英語の上位10：and, however, but, so, therefore, for example, in conclusion, first, second, moreover

日本語の上位10：しかし、また、例えば、まず、そして、なぜなら、だから、さらに、次に、  
しかしながら

英語のエッセイで用いられる and に込められる含意が、どの範囲のものまでかは定かでないが、コンテキスト次第では、ここに挙げられた、and 以外の日・英語の半分の接続表現と and の含意が関係するといえよう（cf. 対立：however, but, しかし、しかしながら；因果関係：so, therefore, だから；添加：moreover, さらに）。

ここで、日英語の個々の接続表現に係る対照的な考察は控えるが、学習者の視点で補足するならば、とりわけ英語では、書き言葉、話し言葉との相性、文頭・文中・文末における生起の可能性<sup>16</sup>、文体上の堅さ（formality）、句読法（punctuation）<sup>17</sup>、個別表現特有の使用上の慣例法<sup>18</sup>などには、十分注意しなければならない。

なお、and に係る含意の8類型だけでは、and が持ちうる含意の相互関係の見当がつかねるため、and の語義の歴史的展開について次節で概観しておこう。

## 2. 1 and の原義ならびに and に係る諸含意の相互関係をめぐる考察

The Oxford English Dictionary 第二版（以下、OED<sup>2</sup>）によれば、and は、歴史的に古期高地ドイツ語や古期ノルド語等の“against, fronting”（～に面する、～に対立する）を意味する、古期ゲルマン

<sup>16</sup> 接続副詞に顕著な特徴であり、文の中で生起する位置が緩やかな however や therefore には注意が必要である。

<sup>17</sup> たとえば、日本語の「そして、」の影響を受けて、and の直後にカンマ（,）をつけて、“And, ...”という句読法上の誤用は少なくない。また、therefore や however の使用上、セミコロン（;）を使うケースには注意が必要である。たとえば、For students, there is a tendency to socialize in the evenings; therefore bedtimes and rising times are fairly late. (BNC: ファイル A75; 文番号:344)

<sup>18</sup> たとえば、因果関係を取り持つ hence は、書き言葉とされ、堅い文体を形成するが、結果を表す際に、通常の文や節を導くだけでなく、動詞を省略して名詞句のみによる簡易表現を許容する場合があります、その点に注意が必要である：

Should tobacco manufacturers be allowed to market their products around the world? Slow growth plus legal and regulatory fights have made the domestic market less profitable in recent years. **Hence** the search by tobacco companies for more profitable opportunities by targeting overseas markets to meet their short-term objectives and long-term goals. (AR, p. 47; 太字は高橋による)

ただし、このような hence の後の名詞句による帰結の表現方法は formality の観点から“less formal”とされている (Larsen-Freeman & Celce-Murcia, 2016<sup>3</sup>: 560)。他方、通常の節を導く場合も例示しておこう：

The violent emotions aroused by the horrible crime make it impossible to find a local jury of people who have not made up their minds against the defendants. Hence, it is probable that the trial will be held in another area. (Quirk et al. 1972: 669; 太字は高橋による)

諸語の前置詞に由来する。実際、古期英語では、接続詞としてだけでなく、与格支配の前置詞としても機能していた<sup>19</sup>。*and*に係る諸含意の相互関係を考察する上で、同辞書の項目 *and* 冒頭部にある、次のコメントにも留意しておきたい（一部、オリジナルにある略記は元に直す；太字は高橋による）：

From the idea of **opposition, juxtaposition, or antithesis**, the word was used in the Teutonic languages to express the mutual relation of notions and propositions.

[趣旨：*and* の起源となる語は、対立、並列・並置、対照を念頭におきながら、ゲルマン諸語では、諸概念、諸命題の相互の関係を表すのに用いられていた]

ここでいう「対立、並列・並置、対照を軸とする諸概念・命題の相互関係」を現代英語の *and* も本質的に受け継いでいるものと考えられる。これまでみてきた *A and B* の含意を念頭におきながら、*OED*<sup>2</sup>で *and* の語義で確認してみよう。*OED*<sup>2</sup>から *and* の情報を、これまでの本論での観察状況と近い部分に限りて抜粋し、その枠組みの中に、これまでの観察に見られた含意の項目を位置付けてみる（これまでみた含意の項目は便宜上、四角で囲む）。

A. 前置詞（古期英語では与格支配）：(省略)

B. 接続詞、等位（語、節、文のレベル；*side by side with, along with, or in addition to*）：

#### I . Connecting words 語句の連結

語義1. Simply connective 語句レベルの連結

#### II . Connecting co-ordinate clauses or sentences 等位節・文の連結

語義7. Simply connective. 節・文レベルの接続

a. **Additive** 添加

添加<sup>1</sup>

b. **Adversative** 対照・対立

対照関係・譲歩<sup>2</sup>

語義8. Introducing a **consequence** 帰結の導入

a. the historical sequel or consequence of a fact

時の経過・因果関係<sup>3</sup>

b. the predicted consequence or fulfilment of a command, or of a hypothesis

put imperatively, or elliptically.

命令・仮定の帰結<sup>4</sup>

語義9. Introducing an **explanatory, amplificative, or parenthetic** clause or phrase.

挿入的コメント・説明<sup>5</sup>

語義10. Connecting two verbs the latter of which would logically be in the infinitive, esp. after *go, come, send, try*; familiarly and dialectally after various others.

(定型化した枠組み表現) <sup>6</sup>

上記の語義10は、本稿脚注12の後段で例示した *We always try and do our best* のような「定型化

<sup>19</sup> *OED*<sup>2</sup>によれば、古期英語の前置詞としての *and* は、<before, in presence of>（～の前方に、～を前にして）といった空間の位置関係を表す意味 (local relation) と <by the side of, besides, along with, in addition to>（～に比べて、～と共に、～に加えて）といった論理関係を表す意味があり、両者とも、1000 年頃に初出例がある。

した枠組み表現」に相当するものである (cf. ...and we do our best を基底とする節の構造)。この例文に見られる...and do は、口語的な言い方で、通常の表現では to do にあたる (cf. We always try to do our best)。

このようにみえてくると、*A and B* があらわす「諸概念、諸命題の相互の関係」というときの諸概念が、およそ、添加、対照関係・譲歩、時の経過・因果関係、命令・仮定の帰結、挿入的コメント・説明といったものだとすると、これらの諸概念は、どのような過程を経て、*A and B* という形式によって表し得るようになったのであろうか。

*OED*<sup>2</sup>に基づき、語義の初出年を整理してみると、次のようになる。

		(初出年)
<i>and</i> による < 語句レベルの連結 >		c.700
<i>and</i> による < 節・文レベルの接続 >	1. 添加	855
	2. 対照関係・譲歩	c.1000
	3. 時の経過・因果関係	c.1000
	4. 命令・仮定の帰結	c.1000
	5. 挿入的コメント・説明	c.996
	(6. 定型化した枠組み表現)	1526

まず *A and B* 形式の、< 語句レベルの連結 > の初出年が、およそ700年、他方、< 節・文レベルの接続 > の初出年は、語義（含意）や機能により、855年から1526年までの、およそ700年近くの開きがある。< 節・文レベルの接続 > の方では、なかでも「添加」を表す用例が最も古く（855年）、< 語句レベルの連結 > が確認される初出年（700年）から、およそ150年の開きがあることになる。このことから、*A and B* という形式について、A と B の構成要素が、< 語句レベルの連結 > から< 節・文レベルの接続 > へ、言語表現形式の構造上、小さいものから大きなものへ、という方向で使われるようになったことが分かる。この点は、私たちの直観にも適っているように思われる。

一般的に、諸概念の内容は、語句レベルで表されるものよりも、主語と動詞を備えた節や文で表現されるものの方が、より具体的で、描写的であると考えられる。そうした見方のもとで、*A and B* の情報伝達の度合いを考えてみよう。< 語句レベルの連結 > と、主語と動詞を兼ね備えた< 節・文レベルの接続 > とを比べた場合、後者には、< 語句レベルの連結 > により生まれる情報伝達を超えた、より複雑な意味関係を持った情報が盛り込まれる余地や可能性が生まれるものと思われる。いずれにせよ、*A and B* という形式によって、そこに何らかの意味関係を意図して伝えることが可能であり、受け取る側は、並置された両者の意味を、何らかの方法で関係づけようとする認識作用が働くものと考えられる。その結果が、いわゆる含意といわれるものであろう。

< 節・文レベルの接続 > に関して、先にも触れたように「添加」と「定型化した枠組み表現」の初出の時期（855年と1526年）に、およそ700年近い開きがある。この「添加」と「定型化した枠組み表現」を除けば、残りの4つの概念（対照関係・譲歩、時の経過・因果関係、命令・仮定の帰結、挿入的コメント・説明）の出現時期（いずれも c. 1000）は、確認しうる文献上、顕著な差がない。しかしながら、< 語句レベルの連結 > (c.700初出) から、< 節・文レベルの接続 > における「定型化した枠組み表現」の機能（1526年初出）が発現するまでには、およそ800年の開きがある。ほぼ「定型化した枠組み表現」として、すなわち idiom 的な定型表現として慣用的に安定するには、それ相応の時間を要するであろうことは我々の想像に難くない。

以上、接続表現 *and* に係る歴史的過程と現代英語における含意について、その大枠をみてきた。このような含意が複数生じる用例を次にみていこう。

## 2.2 コンテキストによる含意の複合

ここで、一つの文中で一つの *and* が用いられていても、*and* の含意は、コンテキスト次第で、必ずしも一つに限定される必要はないという点に注意しておこう。節をつなぐ *and* の中には、複数の含意が有効に表現されていると思われる用例が散見される。

最初に、*and* が、ある情報を「添加」(*and also*) する際に、追加情報を「同様に」(*and similarly*) の含意で接続する用例をみてみよう。

Beyond market forces, state-level policy will continue to drive clean-energy momentum. States representing 40% of the U.S. population are continuing to move ahead with clean-energy plans, **and** even outside of those states, clean energy is expanding.

(Obama 2017, 第3節最終パラグラフの一部；太字は高橋による)

[概要：(前段の文脈から) 市場の力以上に、米国各州レベルの政策がクリーンエネルギーを求める勢いを加速するなか、米国人口の4割を占める諸州がその方向への計画を進めている最中であり、残りの諸州でも、クリーンエネルギーへの理解が広がっている]

この用例では、*and* 直後の *even outside of those states* (文脈から：クリーンエネルギー政策に具体的に着手している段階の、米国人口の4割を占める州以外の諸州でさえも) という叙述展開もあいまって、この *and* には、“*and also*” の含意と “*and similarly*” の含意が融合していると思われる。

さらに別の文脈では、*and* による情報添加機能をベースとして、「同様に」(*and similarly*) の含意と「従って」(*and therefore*) の含意が融合していると思われる文接続の用例がある：

Of course, one of the great advantages of our system of government is that each president is able to chart his or her own policy course. **And** President-elect Donald Trump will have the opportunity to do so. The latest science and economics provide a helpful guide for what the future may bring, in many cases independent of near-term policy choices, when it comes to combatting climate change and transitioning to a clean-energy economy.

(Obama 2017, 最終節の最終パラグラフ；太字は高橋による)

[概要：米国の政権システム上の利点のひとつは、政権運営が時の大統領によるかじ取りに委ねられている点である。次期大統領候補 D. Trump 氏もその機会に与ることになる。こと環境・エネルギー政策においては、政権に関わらず多くの場合、最新の科学と経済の動向が有効な指針となる。]

この用例では、文接続として *and* が用いられるため、必然的に *and* は文頭に立つこととなる。*And* の前段では、大統領制の権限システムの規則が確認され、その規則にのっとり、時の次期大統領候補トランプ氏にも当然の成り行きとして、その権限が同様に委譲されることが示されている。この *And* には文脈上、“*and also*” の含意を基調としながら、“*and similarly*” の含意と “*and therefore*” の含意が融合していると思われる。また、考察対象としている論考が時の大統領 Obama 氏の手によるものであり、Obama 氏から Trump 氏への大統領職の移行期という国際社会的状況も加わり、一種の劇的効果が醸成されている<sup>20</sup>。このような言語外のコンテキストも背景

<sup>20</sup> dramatic effect の典型例は、Quirk et al. 1972 を参照されたい。



としながら、時の大統領が政権移行を行う次期大統領に対し、より良き選択をせまり、その選択に耳目を集める意図が感じられる。

### 2.3 非明示的な *and* による含意

さらに、必ずしも明示的に *and* が表現されてはいないが、潜在的に *and* の機能が発揮されていると考えられる表現方法や接続副詞についてみておこう。非明示的な「見えない」*and* を意識し、その潜在効果を考察してみる。

関係代名詞の、いわゆる非制限用法といわれる表現方法も、そのような *and* の潜在効果のみられる一例であろう。

次の用例を考察してみよう。

Estimates of the economic damages from warming of 4°C over preindustrial levels range from 1% to 5% of global GDP each year by 2100. One of the most frequently cited economic models pins the estimate of annual damages from warming of 4°C at ~4% of global GDP (4-6), **which** could lead to lost U.S. federal revenue of roughly \$340 billion to \$690 billion annually.

(Obama 2017, 第1節の第1パラグラフの一部；オリジナルの注番号は省く；太字は高橋による)

[概要：地球温暖化による経済への影響がどの程度のものなのかを巡って、ひとつには、4度の気温上昇とすると、年単位で世界全体の GDP4% 以下に抑えるもので、それは米国歳入額では年間約3400から6900億ドルの損失になる見込みである]

この引用にある関係代名詞 *which* は、まず、その代名詞機能により、先行する実質的内容（名詞句）の中心部 *the estimate of annual damages* を主格として受け、後続する述部 *could lead to* ～以下と主述関係を結んでいる。加えて、*which* の「関係づけ機能」により、前段の内容 *One of the most frequently cited economic models ~ global GDP (4-6)* と後段の内容 *which (=the estimate of annual damages) could lead to lost U.S. federal revenue of roughly \$340 billion to \$690 billion annually* を潜在的に *and* が繋いでいるとみることができる。この文脈では、... *and it could accordingly lead to...* と読み替えることができよう。*accordingly* は、*therefore*, *consequently* などとも通じる、帰結を導く（接続）副詞のひとつである。学習者の視点から補足すれば、表現上、*which* の前にカンマ(,)を必要とし、関係代名詞 *which* の限定的な用法と区別しなければならない。

さらに、表現上は、*and* を用いる場合よりも簡略化された、全く同じ、非制限用法の関係代名詞による接続であっても、接続部分に隠れている *and* の含意が前の例とは異なると思われる表現がある：

Because the cost of new electricity generation using natural gas is projected to remain low relative to coal, it is unlikely that utilities will change course and choose to build coal-fired power plants, **which** would be more expensive than natural gas plants, regardless of any near-term changes in federal policy.

(Obama 2017, 第3節の第1パラグラフの一部；太字は高橋による)

[概要：天然ガスによる新電源のコストが、石炭と比べて依然低いことから、電力会社が方針転換して石炭発電所を建設する見込みはない—連邦政府の政策とは無関係に、石炭発電所は、天然ガスよりも費用が嵩むのである。]

このくだりは文脈上、電源コストを天然ガスと石炭で比べると、天然ガスのほうが費用がかからず効率が良いという趣旨だが、それを引用部の前半では、天然ガスの視点から述べ、*which* を



はさんで後半では、石炭の視点から言い換えている。要は、対照的視点で、天然ガスが石炭を凌ぐことを述べている。従って、さらりと関係代名詞の非制限用法で表した部分には、... “*and in contrast*”... という *and* の含意が隠れているとみられよう。つまり、前段 *it is unlikely that utilities will change course and choose to build coal-fired power plants* の内容と、後段 *which (=coal-fired power plants) would be more expensive than natural gas plants, regardless of any near-term changes in federal policy* の内容を、潜在的に *and* が繋いでいるとみられる。つまり、... *and it would in contrast be more expensive...* と読み替えることができよう（表現上、冗長ではあるが）<sup>21</sup>。

他方、同様な見方を広げれば、関係代名詞でなくとも、次例にあるような（接続）副詞 *whereas* にも、潜在的な *and* をみることができる。

Investments like these are contributing to what we are seeing take place across the economy: Total energy consumption in 2015 was 2.5% lower than it was in 2008, **whereas** the economy was 10% larger (Obama 2017, 第2節の第2パラグラフの一部；オリジナルの注番号は省く；太字は高橋による)

[概要：(引用箇所の文脈上、*these* は大手企業がエネルギー消費を抑制してその剰余金を別の経済活動にあてる具体事例を指すが、そうした) 投資のありようは、現在目の当たりになっている経済界全体で起きていることの要因となっている一すなわち、2015年のエネルギー消費が2008年比で2.5%減少した一方で、経済は10%拡大した]

企業活動のエネルギー消費と経済活動の割合が、2.5%の減少と10%の増加という具合に対照的に示されていることから、*whereas* を用いた当該箇所の読みは、*Total energy consumption in 2015 was 2.5% lower than it was in 2008, and in contrast the economy was 10% larger* と重なる。表現上の経済性と簡潔性の面から、対照の効果を必要とするこの文脈のような場合には、*whereas* や *while* が用いられやすいと考えられる<sup>22</sup>。

さて再び、Obama 論考へ目を移してみていくと、文中でダッシュ（—）に率いられて *and* が用いられる、視覚的に特徴的な用法が観察される。コメント・説明を導く *and* といわれるもの

<sup>21</sup> なお、ここまでして、電力源のコスト比較に係る一つの命題を二つの視点から説き起こし、目立たせている背景には、政権移譲を行う、時の大統領 Obama 氏が、クリーンエネルギー化に対峙する石炭業界を過度に優遇する政策を警戒し、釘をさす思いが滲み出ていると言えるかもしれない。時の次期大統領トランプ氏が選挙公約で石炭業に肩入れしていたという、当時の社会文化的コンテクストが見え隠れしているようにも思われる。

<sup>22</sup> このように、先に紹介された8類型にも言及されていたように、対照性を含意する *and* には、対照性や譲歩を含意する場合のあることも知られている。この点については Obama 論考からは離れるが、初年次大学生対象の英語クラステキストにある、次のような一節が確認しやすい。

So the mystery of the terrible hand, it seems, has been solved. It is amazing to see what Deinocheirus actually looked like and to find out more about this giant dinosaur. But Darla Zelenitsky from the University of Calgary says it's “also sad in a way.” Even scientists like a bit of mystery, **and** “that mystery is now gone.” (RE, p.99; 太字は高橋による)

[概要：恐ろしい手を持つ恐竜の謎は解けたが、嬉しい反面、悲しい側面もあるという。一般人のみならず科学者も謎が好きであるが、その謎が一つなくなると悲しいのだ]

この引用を含むパッセージ全体は、2.4mの腕と25cmの爪をもつ恐竜の化石が発掘され、その後、徐々に追加の化石発見があり、異様な恐竜の姿の全貌が紹介されるという内容であるが、そのような謎が解けた最後の一節である。ここで A and B の枠組みでみると、A で、科学者も謎好きな人間である、B で、そうした謎が今やなくなっている、が並置されている。謎を好む状態と謎がなくなっている状態が対照化され、謎を好むにも関わらず、そのような謎が今やない、という譲歩の含意が、この *and* に込められている。恐竜の化石を扱う考古学の謎が解明されて一件落着という単純な話ではない、という意外性の余韻を残すようにも感じられる。学習者の視点で補足するならば、一瞬、違和感を覚えるような接続表現の選択には、立ち止まって、その表現効果や書き手の意図を思い巡らすゆとりを残したいものと思う。英文の趣旨のみ読み取って終わりにするにはもったいないと思われるような英文も少なくないのである。

である。用例をみてみよう。

As a result, it is becoming increasingly clear that, regardless of the inherent uncertainties in predicting future climate and weather patterns, the investments needed to reduce emissions—**and** to increase resilience and preparedness for the changes in climate that can no longer be avoided—will be modest in comparison with the benefits from avoided climate-change damages.

(Obama 2017, 第1節の最終パラグラフの一部；太字は高橋による)

[概要：気候変動に係る不確実性があるものの、温室効果ガス削減に必応な投資は、温室効果ガスによる損害を回避したことによる利益と較べれば、多くはない。]

この引用英文は長い一文であるが、構造上、主部 “*the investments needed to reduce emissions*” と述部 “*will be modest in comparison with the benefits from avoided climate-change damages*” を柱としている。この主部と述部の間に—**and** to increase resilience and preparedness for the changes in climate that can no longer be avoided が挿入されている。この挿入不定詞句は、主部の中心に立つ *investments* (投資) の必要性を補足的にコメントしている。つまり、この投資は、温室効果ガスの削減に必要であるだけでなく、不可避である気候変動に対する強靱さと心構えを強めるのにも必要である、という訴えとなっている<sup>23</sup>。

### 3. おわりに

本稿は、*A and B* の構造と意味の観察からはじまり、*and* がそのコンテキスト (場面、状況、文脈) に応じて複数の含意を帯び、幅広く用いられることを、学術的論考と公的スピーチから適宜、用例をとりながらみてきた。その途中で、英語教育や学習の面から、留意すべき点などについて、十分とはいえないまでも適宜、触れた。学ぶべき知識は学び、英語表現の作法は、その必要に応じて、実際場面での英語運用の機会を積み重ねていく中で身に着けていくことがこれからの学生たちに求められるであろう。

また、*and* の語源的原義が、対立、並置・並列、対照といった意味を主軸として、二つの要素

<sup>23</sup> このような用例がある一方で、次例は、コメント部分が不定詞句ではなく、前置詞句であるが、同様の考察が可能である。

We have long known, on the basis of a massive scientific record, that the urgency of acting to mitigate climate change is real and cannot be ignored. In recent years, we have also seen that the economic case for action—**and against inaction**—is just as clear, the business case for clean energy is growing, and the trend toward a cleaner power sector can be sustained regardless of near-term federal policies.

(Obama 2017, Conclusion の冒頭パラグラフ；太字は高橋による)

[概要：科学的根拠のもと気候変動の抑制が喫緊の課題であることに気づいてから久しい。加えて近年では経済、ビジネス、エネルギー業界が、米国政権政策とは関係なく、クリーンエネルギー志向を持ちつつあることも分かっている。]

この引用英文について、文中の ... *we have also seen that* の *that* 節内の主部 *the economic case for action* (温室効果ガス抑制に向けて取り組む経済面からの取り組み) は、本来、ダッシュで挟まれた挿入節を超えて、述部 *is just as clear* につながっているのだが、ダッシュ (—) と *and* によって、*and against inaction* (温室効果ガス抑制に取り組まないことに対しては反対を唱える) というコメントが挿入されている。*and against inaction* は、*the economic case for action* を、*action* を起こさない逆の方向から表現したものである (文体上の省略を補えば、*and the economic case against inaction*)。ここで、*and* は、文全体の意味を伝える途中段階で、*we have also seen that* 節内に3つある節のうち、最初の節の主部 *the economic case for action* について、説明的なコメントを付しているとみることができる。これにより、*the economic case for action* が強調されることとなる。

を関係づけることにあったことを考えるとき、*A and B* が内包する8つの含意は、個々の独立した性質のものではなく、コンテキストに応じて、人間の一般的な認識活動からも相互に関係づけられるであろう。より詳細な検討や考察を加える余地は残されているであろうが、本稿をもって一つの区切りとする。

### 参考文献

- Huddleston, R. D. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 今尾康裕 2019.「日本の大学生英語学習者によるエッセイでの接続表現を探る—日本語エッセイ・英語母語話者によるエッセイと比較して—」*Osaka University Knowledge Archive (OUKA)*, 大阪大学. <https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/> (2020-09-29閲覧)
- Larsen-Freeman, D. and M. Celce-Murcia. (2016<sup>3</sup>) *The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Language Teachers*. National Geographic Learning & Heinle Cengage Learning.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

### Texts

- Huntley, H. and K. Shidara. (2008) *Introduction to Academic Reading: Acquiring the Essential Academic Vocabulary*. Cengage-Learning (本文中、AR と略記)
- Obama, Barack. (2016) Full text of Obama's speech in Hiroshima. (The Japan Times) Retrieved from <https://www.japantimes.co.jp/news/2016/05/27/national/full-text-of-obamas-speech-in-hiroshima#.Wk8hkxkJ9A> (Online: May 27, 2016; Last modified : June 3, 2016) (本文中、SH と略記)
- Obama, B. (2017) "The irreversible momentum of clean energy." *Science*, published online January 9, 2017. (本文中、CE と略記)

### 辞書

*The Oxford English Dictionary*, 2<sup>nd</sup> ed. (Oxford University Press, 1991) (本文中、OED<sup>2</sup>と略記)

### コーパス

British National Corpus. (本文中、BNC と略記)

Pragmatic Considerations to the Meaning and Use of an English Connective *And*  
in terms of English Education

TAKAHASHI Gen-ichiro

Keywords: English connectives, *and*, context, implications, language education

This paper is mainly concerned with the meaning *and* use of *and*, one of present-day widely-used English connectives. Structural and pragmatic considerations have been made to the form of *A and B*, in which both A and B can be words, phrases, clauses, and sentences, respectively, according to a given context. It has been shown in the related literature (Quirk et al. 1972, 1985 and others) that the English connective *and* has eight types of pragmatic implications according to context: 1) addition, 2) similarity, 3) sequence of time, 4) consequence, 5) contrast, 6) concession, 7) comment and explanation, and 8) condition and hypothesis. Based upon them, I have here presented actual examples drawn mainly from a particular academic article in *Science* (2017) and their critical explanations. Some brief notes have been also made here on the use of some English connectives such as *therefore*, *but*, *however*, *then*, etc., which can be paraphrased by the connective *and*. It will be hoped as the need arises that we can notice and use the implications in the connective *and* depending on its context to promote better communication of ideas between English users.